



88060151

**JAPANESE A1 – STANDARD LEVEL – PAPER 1**  
**JAPONAIS A1 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1**  
**JAPONÉS A1 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1**

Monday 20 November 2006 (afternoon)

Lundi 20 novembre 2006 (après-midi)

Lunes 20 de noviembre de 2006 (tarde)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

---

**INSTRUCTIONS TO CANDIDATES**

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only. It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.

**INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS**

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages. Le commentaire ne doit pas nécessairement répondre aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le désirez.

**INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS**

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento. No es obligatorio responder directamente a las preguntas que se ofrecen a modo de guía. Sin embargo, puede usarlas si lo desea.

次の 1 (a) の文章と (c) の詩のうち、どちらか一つを選んで解説を書きなさい。

1 (a)

午前十一時から営業をはじめているのに、客はひとりもあられなかった。木曜日はいつもこんな調子だからべつに驚きはしなかったが、夜の九時をまわったところで見切りをつけて、壁面照明の電源をすべて落とした。メンテナンスにやってくる担当者さえめずらしがるコーラの瓶の自販機の、ゲームがおこなわれているときには気にもならない冷却モーターの音がずいぶん大きく聞こえる。夜になるといつもおかしくなる耳の調子は、まだ大丈夫らしい。それにしても、ビールやジュースを冷やすために熱が必要だなんて滅茶苦茶な理屈だ。冷やせば冷やすほど放熱し、部屋が暑くなる。それを冷やすためにエアコンを入れると、こんどは室外機が熱風を外に吹き出す。暑さは場所を移すだけで消えはしないのだ。このまま仕事をつづけていたら、俺の人生もなにかを冷やすためによけいな熱を出すだけで終わりがねないぞと胃が痛むほど悩んでいた三十代の自分の姿を、しかし彼はもうはつきり思い出すことができなかった。

ふいに自動ドアの開く気配がして目をやると、靴拭いのうえで若い男女が中をのぞき込んでいる。背の高い観葉植物が邪魔になって、むしろはこちらの姿に気づいていないようだ。ふたりの会話は、なんとか聴き取ることができた。補聴器をはささなくてよかった、と彼は思った。

「なんだか暗いな」と青年が言った。「もう閉まっているんじゃないか」

「真ん中のほうは明かりがついているわよ」

「でも、なんだか暗いよ。ほんとにボウリング場かな」

そこでようやく、青年の目が、針刺しに一本だけ忘れられた細ながい穴のある縫い針みたいな格好でぴんと背筋を伸ばし、黙ってカウンターに立っている彼の目とぶつかった。とにかく頼んでみようと思いをうながし、すたすたと大股で彼のほうにやってくると、こんばんは、と青年は軽く頭を下げた。

「いらつしやいませ」

「すみません、まだ、やっていますか？」と青年は言った。

「あと三十分ほどで閉めるんですが、それでよろしければどうぞ」水のなかにいるみたいに言葉がもこもこ鼓膜の裏側でとどこおる。「ゲームならお楽しみいただけますよ。どうなさいますか？」彼は青年の唇を注視しながら言った。相手の言葉がとぜん聞き取れなくなった場合の助けになればと、もうずいぶん前から意識していることだ。

「じつは、お手洗いを貸して欲しいんです」

青年はうしろを振り返った。連れの女性はべつに恥ずかしがるふうでもなく、前に組んだ両手で小さな革製のハンドバッグの細いストラップを握ったまま、まっすぐに立っている。目鼻立ちのいい顔で、顎を引き気味にしてこちらを見ていた。なにかを我慢しているようなそわそわした感じは見受けられない。

「ずっと走ってきたんですが、車が駐められそうな店はどこも閉まっていて、ここだけ看板に明かりが灯っていたものですから。お借りしていいですか？」

「もちろんです。どうぞ、この奥を右です」

彼はカウンターの隣の貸しシューズの棚のわきから上字に入っていく細い通路を示した。一、二歩離れたところで反応を待っていた連れのほうはどうもすみませんと目で言って足早に消え、その影が見えなくなったとき、やつぱりばくも惜ります、と青年があとにつづいた。

35

この山あいの町では、十一月も夜になるとかなり冷え込んでくるのだが、車のなかがあたたかくて上着を置いてきたのか、女性のほうはベージュのセーターにグレーのスラックスという堅装だった。用を済ませば階下の駐車場へすぐに戻るつもりなのだろう。青年はブルージーンズに紺と白を組み合わせたジャンパーで、なんとなく年下のような印象を与えた。人なつこいけれど、失礼ではない感じの話し方だ。年はどちらも二十代なかばだろう。ともあれこのふたりが最後の客になるわけではないようだ。ほっとしたというのか寂しいというのか、これまでに味わったことのない奇妙な感慨が胸をよぎった。(中略)

40

「本当はもう閉めるところだったんじゃないですか？ まぎわにお邪魔して申し訳ありませんでした」

「とんでもない。なんにせよ、お役に立てて嬉しいです。おふたりがたぶん、正真正銘、ここにやって来た最後の方になるでしょうから」

45

なかをのぞいたときの薄暗く沈んだ印象がよみがえったのか、顔つきが少し変化し、ちやうどそのとき用を済ませて戻ってきた連れの姿を目の端にとらえながら、最後つてどういう意味ですか、と青年はたずねた。

「あと三十分でわたしはこの仕事を辞めるんです。こう見えてもオースーなんですよ。明日からは営業しません。つまり廃業です。安心ください。倒産ではなく店じまいですから。今日はもう、どなたもいらつしやらないだろうと思っておりました」

(堀江敏幸「トランス・トッド」、『雪沼とその周辺』二〇〇三年)

〔注〕堀江敏幸(一九六四～) 小説家・フランス文学者。代表作に『熊の敷石』などがある。

#### 設問

―この抜粋文は「トランス・トッド」という短編小説の冒頭部分です。この部分には、どのような場面が描かれ、どのような雰囲気がかもし出されていますか。

―その雰囲気はどのようにして形成されていますか。

―この語り手の「私」の心の動きはどのように表現されていますか。

―この冒頭の文から読者は、語り手と若い男女との関係がこの後どのように発展していくと予想するでしょうか。



1 ⑥

白い流れとわたしの夜と

白い流れにつづいて夜があつた  
声は とおくから降ってくるように  
雪は しずかにねむらせて  
夜があつた  
5 とおいむかし  
そしていまも夜があつた  
どこへもどつてゆくのか父も母も  
みんなねむった  
10 においのないくらがりへなだれこむとき  
どこかでせわしく 太古といまと  
まじわりはしなかつたかしら  
そして 白い流れにとけこんでいる夜が  
ねむっている人びとをのこしていったのではなかつたかしら  
15 おびたしいことばと  
おびたしい憎悪を口にくわえて  
いくつも いくつもの夜  
ペンとランプが  
舌のうえにむごい種子をはぐくんでいるとき  
すりきれて眠つたのではないかしら  
20 目覚めの時には誰になにを  
捧げるのか忘れてしまつたのではないかしら  
白い流れにつづいて  
いくつもの いくつもの長い夜があつて  
忘れてしまつたのではないかしら

(新藤凉子『詩集 薔薇歌』、一九八九年)

(注) 新藤凉子 (一九三二〜) 詩人。代表作に『詩集 薔薇歌』、『ひかりの薔薇』などがある。

——この詩の中の最も重要なイメージは何だと思えますか。

——「白い流れ」と「いくつもの長い夜」との関係は、この詩のなかでどのような役割を果たしていますか。

——この詩の表現の特徴はどのようなところにありますか。また、それが詩全体にどのような効果を与えていると思えますか。